

## 巻頭言

### 『立命館実践教育研究』第2号の発刊にあたって

立命館大学実践教育学会会長

立命館大学大学院教職研究科長 森田 真樹

2017年度、立命館大学大学院教職研究科実践教育専攻の開設を受けて、「立命館大学実践教育学会」が創設されました。大学内外で教育という営みに関わり教育・研究・実践に携わっておられる方々と共に、幅広くつながりながら実践研究、交流を深めていきたいと考え発足しました。

本研究科は、京都府、京都市、滋賀県、大阪府、大阪市の5つの教育委員会と立命館学園の5つの附属校の連携協力によって運営されています。2019年8月には、「独立行政法人教職員支援機構立命館大学センター」が開設され、教員研修の高度化の実現も目指すことになりました。「立命館大学実践教育学会」は、このような教職研究科の様々な実践を支えるためにも、重要な組織として位置付けています。

コンピテンシー重視の教育、主体的、対話的で深い学び、カリキュラム・マネジメント、社会に開かれた教育課程、チーム学校、さらには、SDGsやESDをはじめとする国際化対応、Society5.0への対応など、日々の教育実践を取り巻く環境は急速に変化しています。最近では、「with コロナ」「after コロナ」という言説もよく耳にするようになりました。先行き不透明な社会であることも確かですが、「after コロナ」時代は、「before コロナ」時代と同じ社会に戻らないことだけは、はっきりとしているように思えます。

このような時代にあっては、私たちが、教育実践の中で「あたり前」と考えてきたこと、「よい実践」を支えてきた教育的価値などを、根本から問い直し、再構築することが求められているのかもしれませんが、もちろん、この変化は、これまでの教育研究のあり方にも同じく再構築を迫るものでしょう。

高度専門職業人である教師は、反省的实践家であり、学び続ける教師である必要があります。「リフレクション」がキーワードとなることは言うまでもありませんが、急速な変化の中で「リフレクション」の質を高めるにはどうすればよいのかという難解な課題について、私たち教育実践者一人ひとりが正面から向き合い、日々の教育実践のあり方の探究を通して、自分自身の最適解を見いだしていくことが求められているのかもしれません。

このような中で、『立命館実践教育研究』第2号が発刊されます。第2号に掲載されている論考での様々な問題提起が、明日の教育実践へのヒントとなり、「リフレクション」の質向上の一助となることを期待しています。そして、今後も、皆様の「リフレクション」の一端を積極的に投稿いただき、学会員で共有できることを楽しみにしております。